Ce qui n'est pas clair n'est pas français

中島　覚
Nakashima Satoru
（広島大学自然科学研究支援開発センター）

教養部の学生時代，フランス語の授業で否定文は ne～pas で表すと習った。ne est は n'est と略されるが，“Ce qui n'est pas clair n'est pas français.”という文には，ne ～ pas が 2 か所もある。「明晰ならざるものはフランス語に非ず」と訳す。その時の授業が面白かったのか，あるいは当時，「ちょっとキザですが」で売っていた元 NHK キャスターの磯村尚徳氏の影響を受けたのか，今でも記憶している。

筆者自身は，フランス語はおろか英語も一向に上達しないが，長年英語に触れていると，目の前の日本語の文さえ主語がどれで動詞はどれかが気になってくる。日本語でも英語でも，意味がはっきりと取れる文を書くこと，その文を一つひとつ論理的に組み立てることがいかに重要かを感じる。そのように書かれた論文などを読むとよく理解できるし，さわやかな気持ちになる。“理解する”とはこういうことなのか，と感動さえ覚える。

教科書を読んでいても，明晰に書かれたものは分かりやすい。ただ，要点を絞り過ぎて書かれた教科書は筆者にとっては読みにくい。授業での講師の説明を前提にしているのかもしれないが，あまりにも簡潔に書かれていると，執筆者にとっては整理が進んだかも分からないが，読者にはどうも理解しにくい。また，あまりにも多くの執筆者により書かれた教科書も読みにくい。全体の流れが汲み取りにくいためだろうか。化学の分野では今でも外国の教科書の翻訳本が多く利用されている。そのような教科書はページ数が多いかもしれないが，簡潔過ぎず，講師の説明なしでも順を追って読んでいけば理解しやすい。筆者にとってはこのような教科書が明晰に書かれていると判断できる。

明晰な文章を書くためには，頭の中のもやもやしたものからストーリーを紡ぎ出さなければならない。複数の人間であれば，ブレーンストーミングを通して論理の筋道が見えてくるのを待つ。会議などで当意即妙に格好よく切り抜けることがあるが，後で考えるとその場しのぎに過ぎないと感じることがある。明晰さは，格好よく切り抜けることではなく，静かな情熱を持ち，論理立てて一つひとつの事柄を積み上げていくことだと考える。

筆者自身は化学の中の 1 つの狭い分野の教育研究を進めてきたが，ささやかな研究を進めながら次の若い方にバトンタッチできればよいと考えている。また，放射線施設にいるので放射線安全管理から離れることはできないが，放射線安全管理に基づく学問を作れないか多くの仲間と奮闘努力している。化学と放射線安全管理は全く異なるが，それぞれの場で継続的な情熱をもって建設的に物事を進めれば，次の世代につなげられるものを生み出せるかもしれない。先輩たちが積み上げてきたものを引き継いで幾ばくかの追加を行い，次の世代に引き渡すためにこそ明晰さが必要であると考える。